

近代文学研究叢書

第十一卷

昭和女子大学

近代文学研究室

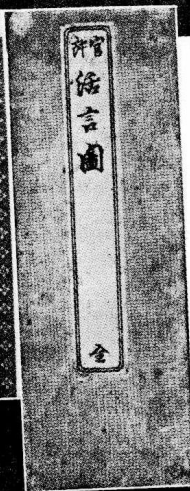
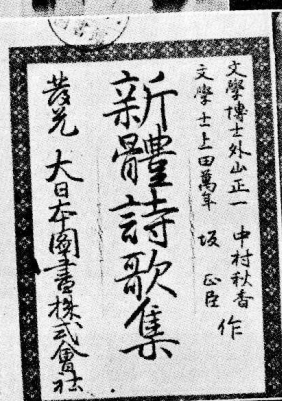
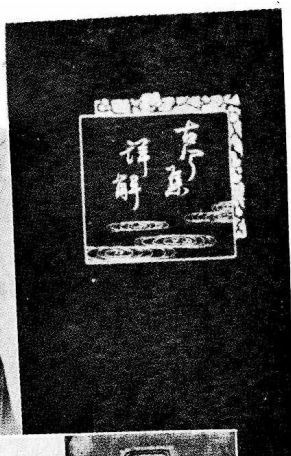
中 村 秋 香

秋香晩年の肖像

(中村浩氏蔵)

「秋香集」一明治四十年六月刊

(昭和女子大学蔵)



↑「古今集詳解」
秋香講述・門人加藤きみ子筆記のもの
明治四十一年十月刊(昭和女子大学蔵)
「官許活言圖」一明治五年刊
(無窮会図書館蔵)

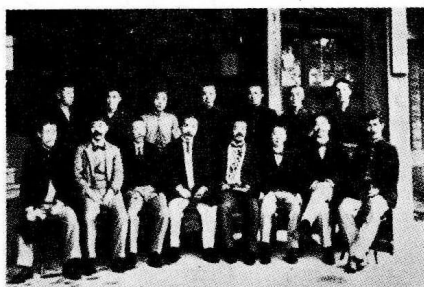
中央「新體詩歌集」の扉
明治二十八年九月刊
(昭和女子大学蔵)

「秋香歌かたり」
明治四十年六月刊
(昭和女子大学蔵)

「落窪物語大成」表紙
(昭和女子大学蔵)

藤岡 作太郎

明治三十八年国文学科卒業生と山上会
根正、直、岡田、正之、芳賀、矢一、藤岡、作太郎、岡田、由夫氏蔵



「我専会文集」一回覧誌
明治三十二年頃
(藤岡由夫氏蔵)

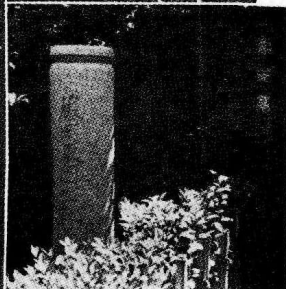
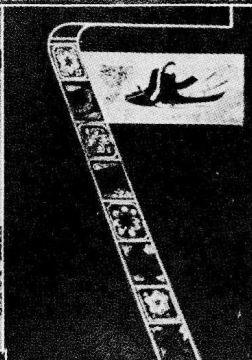
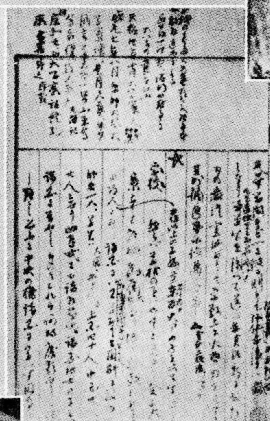
「国文学全史平安朝篇」
明治三十八年十月刊
(昭和女子大学蔵)

金沢市早道町八十番地所在
の生家李花亭及び記念碑↓

「近世絵画史」——明治三十六年六月刊（上野図書館蔵）

文学士藤岡作太郎著
近世絵画史
東京 金港堂書籍株式會社

文学士藤岡作太郎著



中央「平安朝文学史」講義用自筆
稿本 (藤岡由夫氏蔵)
←「東園遺稿」第一卷
(昭和女子大学蔵)

李花亭文庫——石川県立中央図書館内

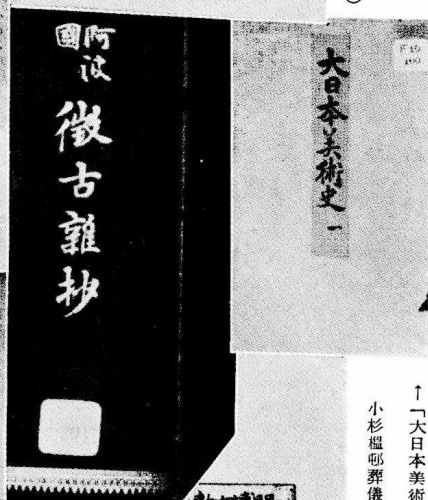
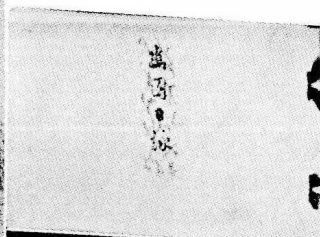


小 杉 楓 邨

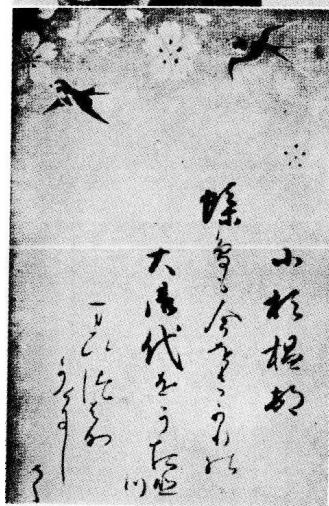
← 小杉楓邨肖像



「幽囚日詠」——明治四十三年九月刊（昭和女子大学蔵）

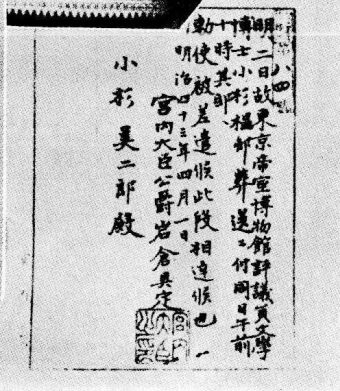


↑「大日本美術史」——明治二十八年五月刊（東京大学図書館蔵）
小杉楓邨撰儀勅使差遣の文書（小杉正氏蔵）



「明治百人一首」——大正四年刊（東京大学図書館蔵）

中央「阿波国徴古雜抄」——大正二年刊（東京大学図書館蔵）



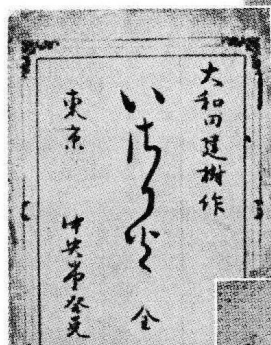
大 和 田 建 樹

大和田建樹肖像→
(舟橋さわ子蔵)

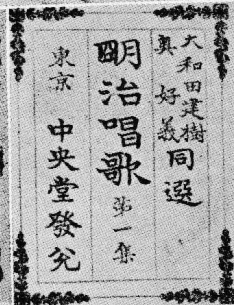
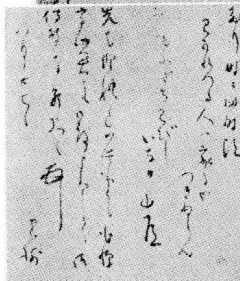


「明治文学史」—明治二十七年十月刊
(昭和女子大学蔵)

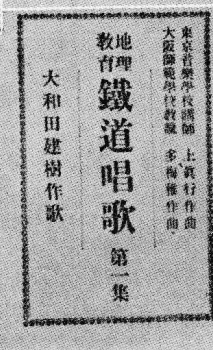
「いさり火」—明治二十一年十二月刊
(昭和女子大学蔵)



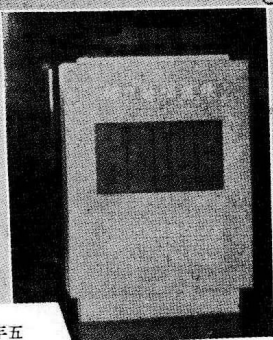
「明治唱歌」第一集—明治二十一年十月刊
(昭和女子大学蔵)



「地理教育 鉄道唱歌」第一集—明治三十三年五月刊
(昭和女子大学蔵)



「欧米名家詩集」—明治三十二年五月刊合本
(昭和女子大学蔵)



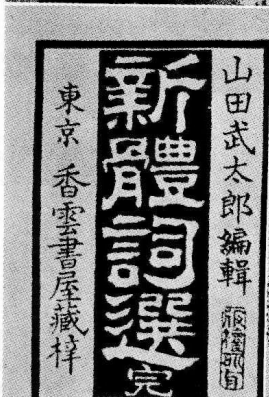
東京新橋駅にある「鉄道唱歌」の碑

山 田 美 妙

上段 左美妙と父吉雄の写真（加納八重子氏蔵、中央「監製在紙」の原稿（本間久雄氏蔵）、右「夏木立」明治二十一年八月刊（昭和女子大学蔵）



左「新体詞選」——明治十九年八月刊（昭和女子大学蔵）
右美妙自筆の詩（山田勝彦氏蔵）



左「嫁入り教師三昧」——明治二十三年十月刊（昭和女子大学蔵）
右「白玉蘭」——明治二十四年十月刊（昭和女子大学蔵）



大 塚 楠 緒 子

小屋保治と結婚当時の面影

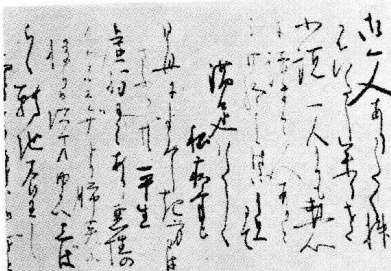
(昭和女子大学蔵)

楠緒子の手紙

(昭和女子大学蔵)

中央「お百度詣」——太陽二の一号
明治三十八年一月刊
(昭和女子大学蔵)

二段右——大塚楠緒女史筆「慈眼瞰下界」——文芸俱樂部三卷二編
明治三十年一月号掲載



お百度詣

大
學
精
義



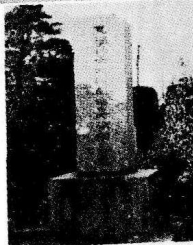
名の音

(3)

[illegible]

2000

大塚神子



楠緒子自筆稿本扉

雑司ヶ谷にある
楠緒子の墜

「しのび音」文芸倶楽部三
卷二編—明治三十年一月号
所載（昭和女子大学蔵）



楠緒子の自筆稿本（佐佐木信綱氏蔵）

目次

口	繪	
第十一卷の成立	昭和女子大學 近代文學研究室	(一〇)
凡例	昭和女子大學 編輯室	(一五)
中村秋香		(一七)
藤岡作太郎		(八三)
小杉楹邨		(一四)
大和田建樹		(二三)
山田美妙		(二六七)
大塚楠緒子		(四三)

第十一卷の成立

本巻は明治四十三年一月から十一月までに歿した左の六名の調査研究を収めた。

中村秋香は天保十二年静岡に生まれ、少年時代から古歌集、国文、漢詩を学び、安政五年東條義門の門弟正音法師に国語学の講説を受けた。文久二年駿府明新館に入学、漢学を修め後助教授になった。その後教部、内務、文部省等に勤務、明治二十年以後は東京高等女学校、東京女子高等師範学校、第一高等中学校、東京音楽学校等で教鞭をとり、三十年御歌所寄人拝命。三十四年には名著「落窪物語大成」を出版。諸註を参考し、十三種の異本を校合し、長く利用された。四十三年一月死、七十歳。彼は国文註釈や新体詩、和歌の方面でひろく活躍し、二十八年太陽に発表の「新体詩論」で新体詩論を説き、新体詩の規範を古来の和歌の格調においた。同年外山正一等と「新体詩歌集」を出版、その作二十三篇を、又三十一年の「新体詩集月の桂」に五篇を収録し、やや自由詩の傾向がうかがわれた。唱歌には「歴史唱歌」、「日露戦争国民唱歌」、「行進曲凱旋」等があり愛国心を高揚させ、「学校唱歌」、「卒業式の歌」、「漁業の歌」等はひろく歌われた。和歌では既成觀念にとらわれず、天真のこえを自在に歌い上げるといふ態度をとり、四十年発行の「秋香集」収録のものには、自由さと敘景の清新がみられる。文法については実用化に意を用い、西洋文典に附会する弊をいましめ、日本語本来の文法の条理を強調し、「皇国文法」、「同釈義」の著があり、「活言図」では本居、東條派の学説を継承し、用言活用の整理統一を試みた。

藤岡作太郎は明治三年加賀金澤に生まれ、幼時より聰明強記であつたが持病の喘息で生涯苦しんだ。二十四年第四高等中学校に入学、西田幾多郎らと回覧誌「我尊会」を出し、篁村調の戯文などを載せた。二十四年九月帝国大学文科国文科に入学、古書旧記の読破、抄録、实地踏査につとめ、二十七年卒業。北国新聞に「薄曇月橋物語」、「富樫左衛門尉泰家」などの小説を連載した。三十年第三高等學校教授。古典、国文学史などを講じ、その嚴格真摯、豊かな学殖と徳望とは畏敬的となつた。同時に洛中洛外、奈良の名所旧跡、神社仏閣をめぐり、絵画彫刻建築等の理解と鑑賞につとめ、後年の著「近世絵画史」、「国文学全史平安朝篇」の素地をつくつた。三十三年九月東京帝国大学文科助教授に任ぜられ、芳賀矢一のあとをうけて国文学史を担当し、平安朝文学史、鎌倉室町時代文学史、近代小説史、日本評論史、国学史など前人未踏の分野を開拓して、「国文学全史平安朝篇」、「国文学史講話」を出版した。その態度は、個々の考証、訓詁、註釈風と類を異にし、底に流れる生命の脈絡をとらえ、豊富な材料の有機化、組織化をはかり、時代思想や環境との関連から文学の変遷を敘すという総合的、科学的なものであつた。四十三年二月宿病のため日本文学の「全史」を成しとげることなく三十九歳を以て夭折した。

小杉楳邨は天保五年阿波徳島に生まれた。少年時代から藩の学問所で和漢の学を修め、のち江戸に出で古学館に入門して国典、歌文等を学び、小中村清矩、久米幹文、黒川春村等と交わつた。文久二、三年の頃郷里で尊王論を同志に鼓吹したため忌諱にふれ幽閉、自宅謹慎、城外追放と受難の五年を経た。その間、阿波の古文書の収集、考証に日を送つた。明治十四年文部省に入り、「古事類苑」の編纂に従い、和田英松らと最も大部

な神祇部をまとめ、又十九年には本居豊穎、久米幹文と大八洲学会を設立、「大八洲学会雑誌」を発行して国文の研究と普及に尽力した。二十九年三宅米吉、下村三四吉等と「考古学会雑誌」を発行しその系統は現在に及んでいる。早くから古文書、古記録の収集につとめ、社寺、名族を訪ねて雑史、家乗、日記等歴史研究に必要な断簡、零墨を書写してこれに註解校合を施し約百四十冊に及ぶ「徴古雜抄」を編録し、又「大日本美術史」十冊を脱稿、その業績には後学を裨益するものが甚だ多い。十五年より東京大学古典講習科国書講師を初めとして、御歌所参候、博物館鑑査課古文書科主任、御物鑑査御用、東京美術学校教授、東京帝国大学講師、日本歴史地理学会顧問、日本女子大学教授、古社寺保存国宝計画調査委員、国学院講師などに歴任したことに徴してもその碩学のほどがうかがわれる。四十三年三月七十七歳を以て死去。

大和田建樹は安政四年伊豫宇和島に生まれ、幼くして和漢の学や、廣島外国語学校で英語を学んだ。明治十二年上京、国文を独学研究し東京大学古典科講師、男女高等師範学校教授、跡見、雙葉両女学校の講師等に歴任し、著述、作歌に努めた。早期の著「謡曲通解」は貢献するところが大きかった。早く文学史の必要性を認め、二十五年から三十二年の間「和文学史」、「明治文学史」、「日本大文学史」を著わし、引例による解説啓蒙に力をそそいだ。特に近代文学においては小説、新聞、雑誌の意義を重視し、新聞時代を設けてその威力を認めた。唱歌作者としては「書生唱歌」、「明治唱歌」等を出したが、「鉄道唱歌」は平易流暢な七五調と軽快な曲により山間僻地まで流行した。又スコットランド民謡の曲をつけた「故郷の空」は今も愛唱されている。新体詩作者としての彼は「新体詩抄」によって覚醒された一人で、二十七年訳詩集「欧米名家詩集」を出版、

多くの西洋詩を紹介した。「新文林」、「雪月花」、「野菊」等に二百篇以上の作品を発表し自然と人事を題材として海浜山野をうたい、庶民的田園生活の中に人生の哀歓を歌い上げている。和歌には特に力を入れ、歌集「山したみづ」、「大和田建樹歌集」に着想の新味があり、温雅流麗のものが多し。百五十四冊の旅日記を書き、六十篇の紀行文を残した。彼の作品はいずれも平明簡潔、ひろく愛読された。四十三年九月海軍軍歌の製作中、疲労のため病にたおれた。享年五十三。

山田美妙は明治元年東京神田に生まれ、少年時代から文学を愛好し、尾崎紅葉とは幼馴染の親友であった。十七年大学予備門に入り、翌年紅葉、思案、九華らと硯友社を結び、「我楽多文庫」に「豎琴草紙」を執筆。十九年紅葉、九華と「新体詞選」を出版、「戦景大和魂」などを発表。この年予備門を中途退学してより文学に専念、雑誌「以良都女」を編集、小説、新体詩、評論などを連載、言文一致文体の実験と普及につとめた。二十年読売新聞に言文一致の歴史小説「武蔵野」を発表し文名高まった。二十一年雑誌「都の花」の主幹となり、紅葉等と次第に疎遠になった。八月最初の短篇集「夏木立」を出版。二十二年国民之友附録に「蝴蝶」を掲載、渡邊省亭の挿絵と相俟って反響著しく、弱冠にして流行作家となり、その抒情詩的敘景の美と言文一致の新しさは読者を魅了した。次いで「日本韻文論」、「青年唱歌集」を発表、詩の形式、律格の整備、内容の拡充、新体詩の向上発展に努力し、口語詩を試作するなど、一歩近代詩へ前進した。彼の仕事は小説、評論、脚本、詩、戯曲研究、辞書編集等きわめて多方面にわたり、結局いずれも未完成に終わった。その鋭い感受性は消化育成よりも新味の吸収実験に適し、創作的啓蒙的文学者としての功績が大きい。この未完成がわざわざいし

て声価をおとし、更に私行がジャーナリズムの指弾を受け、天才的才能も終りを完うせず文壇の主流から離れた。二十八年文芸倶楽部に「阿千代」を発表して再び活躍するかに見えたが、その後振わず、比島独立運動に取材した「あぎなると」、歴史小説「平重衡」等を発表するかたわら、辞書編纂に晩年をおくり、四十三年不遇の裡に幾多の功績を遺して病死した。四十三歳。

大塚楠緒子は明治八年東京に生まれ、二十三年女子師範学校附属女学校を首席で卒業。二十八年帝大哲学科出身の小屋保治を迎えて結婚した。この年文芸倶楽部閨秀小説号に花圃、賤子、一葉等の先輩にまじって「暮ゆく秋」を、三十年同誌に「しのび音」を、三十五年婦人界に「離鴛鴦」を発表し世の注目をひくようになった。三十九年に出した小説集「晴小袖」の「七色」は従来作に見えない題材と構想により好評を博した。四十年万朝報に長篇「露」を発表、四十一、二年にわたり東京朝日新聞に「空薫」前篇、続篇を発表した。小説全体を通じては、なお習作の感が深く一葉の深刻も稲舟の奔放もなかった。女流歌人としては竹柏園門下で橘系重子、片山廣子等と注目せられ、その歌風に清新温雅なものが多い。彼女の新体詩のうち、その名を詩史にとめたものは三十八年一月の太陽に掲げた長詩「お百度詣」で、出征中の夫を思う妻の情を歌い世の女性たちが胸裡に秘めた苦悶をすなおに表白した。前年明星誌上に発表された晶子の「君死に給ふこと勿れ」と並べ称せられるものである。四十三年十一月病のため三十六歳で夭折した。

(昭和三十三年十二月一日 昭和女子大学近代文学研究室)

凡 例

一、研究調査に着手してから本叢書刊行に至るまで、凡そ二十二年を要しているので、指導者中で岡田哲藏、福井久藏、池田龜鑑の三先生はすでに鬼籍に入り、研究担当者中にも病でたおれたものが数名ある。本叢書をこれらの人々に見てもらったならばさそよろこび下さるであらう。謹んで霊前に献上する。

二、本叢書は卒業期に近い学徒の中から担当者を選び、調査研究の範囲、方法、次第などを相談して、先ず第一に業績の検討に着手した。不明、疑問、困難、迷路などにつき当りつつ一年ぐらいするうちに明瞭になるので、次の年から生涯と遺跡を究めてからいよいよ論文作成にとりかかった。このとき、材料の批判、整理、布置、論文の構成などについて相談しながら脱稿に至る。ついで修訂、校閲を経てから編集という順で、その間約二カ年が費される。

三、収録事項の研究に対し、直接間接に協力した学徒は延三千名に上るが、その協力と、歲月の恩恵に加うるに学界、文壇、教育界、操觚界など各界先輩の懇切な教示と、遺族及び関係者の好意を感謝する。

四、年表で著作というのは、発表が生前と死後とを問わずその作者の作品のすべてを指し、資料とは、第三者の考説、論評、感想等の文献を指すのである。従つて死後刊行された全集物や編集物は著作年表に、第三者の解題や解説の如きは資料年表の中に収めた。又、単行本の中で編集ものは、所要の小題を書題名欄に、書名

と発行所を誌紙名欄に、小題の執筆者を筆者欄に掲げることとする。

五、年表の末尾に追込んだ分は氏名のみが引用されている場合が多い。資料の価値は研究の分野、方向又は時代によって移動するものであるから、できるだけ取捨をさける方針にしたが、紙面の都合で割愛の止むなき場合がないともかぎらない。

六、各稿の末尾に「採訪」と「文献」を掲げたのは、研究調査の際に訪問して教示を仰ぎ、便宜を与えられた方々に感謝の意を表すると同時に、資料の出所、起稿や修訂に当って参考した文献書目を記して、その依拠を明らかにした。ために研究資料の所在表示を旨とする「資料年表」と一部重複することがある。なお採訪した人の記名は年齢（雅定）順、文献の記載も発表年次順にした。

七、引用文はすべて原文に従い、外国文の場合は訳文を添付するが、通読に便するため時に大意を用いることもある。なお原文中の誤りや疑わしい箇所は右側に（ママ）と記入し、又、異本を示す場合も同様（イ）と記入する。

八、外国の国名、地名、人名は片仮名を原則とし、倫敦、桑港のように慣用久しいものでも、逐次片仮名に改めるつもりである。但し、すでに日本語化しているものはこの限りでない。

九、邦人氏名は旧漢字を用い見出しに振りがなをつけ、外人名の初出は原語を付し以下片仮名を用いる。

一〇、年代は日本年号と西暦とを適宜織りまぜて、どちらからでも検索できるようにした。年齢は満年齢を採用了が、場合によっては数え年何歳としるすこともある。

（昭和女子大学編集室）